

崇徳天皇歌壇資料集成

(1)——天承長承期——

〈俊成研究ノート(1)〉

松野陽一

御裳濯河歌合の第一番判詞の跋文によると、俊成は「天承長承のころほひ」から、「はこやの山の花の本」や「雲井の月の前」の歌会に加はつたといつてゐる。天承元年（一一三一）は、白河院没後二年、鳥羽院政下で崇徳天皇の時代である。そして、記録・歌集等の諸種資料によると、この年から崇徳天皇（一三歳）内裏での歌会が急に頻繁に行なはれるやうになつてゐる。現存する資料に偏在があるとしても天皇の年令からみて、頻繁な歌会の催しは、それほどこの年を遡ることとはないと考へられるので、崇徳天皇内裏歌壇と、俊成の歌人としての出発点はほぼ一致してゐたといつてよいだらう。もつとも、現存する俊成の歌で最も早いと認められるものは、長承三年の常磐五番歌合のもので、内裏関係に出詠した作品で明徴のあるものは、保延年間のものがあるに過ぎず、天承・長承頃のものを見出せない。長秋詠草の表記でも、詞書に「保延のころほひ」とある作品は、「かなり早期の」といふやうな意識で書かれてゐるやうで、長承年間の成立と推定される「為忠百首」からの入集歌の詞書には、「早く」といふ表現がみられるのである。このことは、後年の俊成の眼からすると、水準に達しない作品しか作り得なかつた、といふことになるのだらうが、天承・

長承年間の内裏歌会に出席した可能性はかなりあるのであり、よしんば出席し得なかつたとしても、活潑化した歌壇の常連の多くと知己の關係にあつた彼が、その刺戟を受けぬと考へるのは難しい。青年期の歌人としての俊成（天承元年一八歳）を考へてゆく上には、手本に仰いだ古典作品や、俊頼・俊基等の先達との關係と同時に、彼の身を置いた環境も考へてゆく必要があらう。そこで、かなりまとまつた資料のある常磐での私的な交友圏の他に、公的な内裏歌壇の内容が検討される必要がありさうに思はれるのである。

天承から保元の乱に至る約二五年にわたる崇徳院を中心とする歌壇は、井上宗雄氏の分析された（「詞花集をめぐる歌壇」平安朝文学研究第五号）やうに、永治・康治の頃を境として二分できる。天皇は永治元年（一一四一）に讓位したから、前半は天皇期とも呼ぶことができるが、本稿では、紙幅の關係で、その極く初期、「天承長承のころほひ」の内裏關係の歌会の資料を集成してみることにした。もとより断片的な資料しか残つてゐないことでもあるので、諸歌集からの集成と記録類とを結びつける作業は、類推を重ねた、いささか索強付会のみきらひのあるものとなつたが、輪郭をつかむための基礎的な作業とし

て、その点を恐れず、可能性を大きく広げてまとめてみた。大方の御示教を仰いで補訂してゆきたいと思つてゐる。

当該期間の天皇中心の歌会を、和歌文学大辞典の付録年表を基に列挙してゆくと次のやうになる。

◎大治5・9・13 内裏藏人歌合〔補註参照〕

(1)天承元・8・27 内裏歌会

(2) 9・6 内裏歌会

(3) 9・8 内裏当座歌会

(4) 9・9 内裏十五首歌会

(5) 9・15 内裏歌会・当座歌会

(6) 9・26 内裏歌会

(7)長承元・12・23 中殿初度歌会

(8)長承元・12・23 内裏十五首歌会(8)長

(9) 3・4・11 内裏十首歌会

(10) 3・4・11 中宮初度歌会

このほか、諸歌集で、「崇徳院の位の御時」とか、単に「内裏会に」などといふ詞書を持つ歌の中にもこの期のものが含まれる可能性はあるが、それは保延以降の稿に雑纂的に扱ふこととする。本稿の重点は(3)(7)の二種の十五首歌会と(8)の十首歌会にあり、それによつてこの期の歌壇の大勢が看取ればよいと思つてゐるので、その他のものについては、「私注」も簡略を旨とした。そして、この集成資料には直接に名がでてこないが、先述の如く、頭広(俊成)の歌壇登場期の資料とすることを目的とするための、整理上の不統一も若干あることを断つておきたい。この期の歌壇と俊成との関係についての私見は、これも紙

幅の都合で別稿(平安朝文学研究第二卷第四号に掲載の予定)に譲る。併せ御覧いただければ幸甚である。

以下の集成本文は、次の要領で記述してある。題は、記録のあるものはそれを記し、歌集から補へる場合には併記。歌集のみのもは原型を推定した場合がある。仮名は全て漢字に直した。作者は、歌のあるもののみを記した。従つて記録にのみ名の出るものは、「資料」の方に譲つてゐる。本文拾遺は、題毎に歌のみを集成した。この場合、出典の詞書は「資料」の方に廻してある。当該詞書は、歌の頭記一連番号に照応してゐる。例へば、(3)内裏十五首歌会の「述懐」・成通の歌(21白河の)の詞書は、「資料」〔詞花集詞書〕21「新院位に……」の如きである。

作者名は出典の表記によらず、名のみを記した。頭記一連番号で、「1・2」等の数字は、その歌会の歌として確実と思はれる歌、「イ・ロ・ハ」は、存疑の歌である。歌の後には出典資料を略称で示した。「資料」は集成の根拠となる記録類、歌集の詞書を記した。〔私注〕は当該歌会についての稿者のメモである。

集成資料本文

(1)天承元年八月二七日内裏歌会

題 月契遐年

作者 成通

本文拾遺

月契退年 成通

1千年まで君のみそみむ久かたのひさしかるへき秋の夜の月(成通集)資料

〔時信記・天承元年八月二七日〕

今夕有殿上和歌題云月契退年行宗所進会衆依勅定催之下官此間夜々雖

参内畏以前可無便之由大殿殿被御仍今夜不献和歌又不参内之

〔私注〕現存資料での、崇徳天皇内裏歌会の嚆矢である。無論、これ

以前にもあつたと思はれるし、事実、時信記九月八日の条によると、

十五首会の題の議定が六月から行なはれてゐた(5ページ参照)とあ

るから、当然歌会も行なはれてゐたのだらうが、成通集にある「内裏」

「内」と注記のある歌は、知られる限りほとんどがこの年の八、九月

のものなので、この資料の照応の程度からすると、これ以前に行なは

れたとしても、余り多くはなかつたと考へてよささうである。

時信記から推察するところ、この会は天皇近臣による小規模な会と

思はれ、大略、九月九日の十五首会のメンバーの範囲を出ない、常連

の催だつたものと思はれる。

(2)天承元年九月六日内裏歌会

題 雲外聞鷹

資料

〔時信記・天承元年九月六日〕

今夕有和歌会題雲外聞鷹敦光朝臣

会衆十有許輩 勅嘯有限於二間卷南間弘相被講之女房被出三首 主上簾中之覽之立短燈台一本無打

左少将公行為講師頭中将宗能朝臣為読師深更事了人々分散

〔私注〕現存歌集に「雲外聞鷹」題の歌を見出し得ないが、八月十月の会とはほぼ同じメンバーの会であつたのだらう。女房の作品を、巻き上げた簾中の中の燭台の傍らで見ている幼主の姿などは、笑ましい。

(3)天承元年九月九日内裏十五首歌会 付当座歌会

題 霞、鶯、桜、五月雨、郭公、盧橘、鹿、女郎花、雪、水鳥、芦、

恋、述懐 当座題 遠思野花

作者 成通、教長、公行、実行、時信、盛定

本文拾遺

霞 成通

1音羽山をとにきけとや春霞かた、にみえず立かくすらん (成通集)

教長

イ春霞けふりとみえてたちにけり今こそそのへはもえわたるらめ

(貧道集)

鶯 成通

2鶯やとしのはしめと告つらんなくひとこゑは春めきにけり(成通集)

教長

ロうくひすのはつ声きけはこほりせぬ心さへにもうちとくる哉

(貧道集)

桜 成通

3めにみえぬ心にたにもとまりけり枝なはなれそ春のはつ花(成通集)

教長

ハ山さくらおしむ心はときはにてあたにも花のちりぬへきかな

(貧道集)

4 あらしふく志賀の山辺のさくら花ちれは雲居はさ、波そたつ
公行
(千載・春下)

五月雨 成通

5 水まさるふるえのあやめ今更に生いつと見ゆる五月雨の空(成通集)

郭公 成通

6 一声のなとつらからんほと、きすきかて明ぬる夜たに社あれ
(成通集)

公行

二さ夜ふかみやまほと、きすなのりしてきのまろとのをいまそすく
る
(新勅・夏)

廬橘 成通

7 我宿の物ならなくに匂ひ来る花たちはなのあるしともかな(成通集)

教長

8 わか宿の花たちはなを吹風はたかためにとか、をさそふらん
(貧道集)

鹿 成通

9 夜もすから妻とふ鹿を聞かからに我さへあやない社ねられね(成通集)

教長

ホさを鹿のつまとしめたる秋萩のうつろふ袖やこ、らなくらん
(貧道集)

女郎花 成通

10 女郎花なひくをみれば人しれす秋吹風そうらやまれぬる (成通集)

教長

へ女郎花くちなし色にさきぬれはおくしら露はなのみなりけり
(貧道集)

雪 成通

11 しら雪の行かふみちをしらせねはまた音つれぬ遠のさと人(成通集)

教長

ト降雪にかつうつもれて道もなしいかにか駒のあとをたつねん
(貧道集)

水鳥 成通

12 夜とともに霜をくつるを水鳥のうら山しくや下にもゆらん(成通集)

教長

13 よもすからつかはぬをしの鳴声にめもあはてこそ我も聞つれ
(貧道集)

実行

14 夜もすから鴨の上毛を払ふかな幾度霜の置くにかある覧
(新拾・冬、万代)

時信

千水鳥のうきねのところにつら、ゐて心の外に夜かれしにけり
(後葉・冬)

声 成通

15 冬ふかく成にけらし難波江の青葉ましらぬ声のむら立
(成通集、新古・冬)

教長

16 風ふけはみきはなひくあしのほをたつ白波とおもひける哉
(貧道集)

(貧道集)

祝 成通

17 言の葉にかけてもいか、祝ふへき計をしらぬ君が代なれば(成通集)

教長

18 幾とせも限もしらぬためしには君かみよをそひくへかりける

(貧道集)

時信

りきみかよは天照かみの宮造八百万たひあらたまるまで (万代集)

恋 成通

19 あちきなや誰思ふことなれば我身にかくて人をこふらん (成通集)

教長

20 逢みんといつはりたにたのためをけ露の命のかゝるはかりに

(貧道集)

述懐 成通

21 白河のなかれをたのむこゝろをは誰かは空にくみて知るへき

(詞花・雑下、後葉・雑二、今鏡・藤波の下)

教長

22 数ならぬみをうきくもは吹風にゆくへもしらすきえぬへき哉

(貧道集)

公行

23 春日山まつにたのみをかくるかな藤の末葉のかずならねども

(千載・雑中、続詞花・雑下)

盛定

24 限りありて立はなれなは春霞恋しかるへき雲のうへかな (成通集)

堂座会

遠思野花 成通

1 あかすして過ぎし野への花薄たつねは道に秋やくれなん (成通集)

資料

〔時信記・天承元年九月八日〕

今夕可被講十五首題 件題自去六月 有議定 和哥雖有病者必可預參之由勅定

之旨藏人被告送仍触申大卿殿參内件題 勅嘸有限抽召堪道之輩所

謂 行宗 成通 公教 教長 公行 盛定 時信 盛忠等也 深更人々參集題目数多未案得一兩明夕

可候之由皆悉被申請仍延引了

以件人々於御前有当座会題云遠思野花 行宗 進之 曉更被講其儀如一昨日

事了雲客讌遊之儀鷄鳴退出

〔同・九月九日〕

壬寅関白給退出乘燭之間依 勅定有限參内人々皆參被講和哥十五

首其儀如昨日遅明講了人々退出。

〔貧道集詞書〕 18

内裏の十五首会に祝をよめる

〔詞花集詞書〕 21

新院位におはしましける時うへのをのこともめして述懐の歌よ

ませ給ひけるに白河院の御事忘る、時なくおぼえ侍りければ 大

納言成通

〔今鏡〕 21

讃岐の院位の御時十五首の歌人々に詠ませ給ひけるに述懐といふ

題詠み給ふとて

〔千載集詞書〕 23

崇徳院御時十五首歌奉りけるとし述懐の心をよみ侍りける 右兵衛督公行

〔統詞花集詞書〕23

新院御時うへのおのこともにまたの題をよませさせ給けるにお
もひをのふる心を 右兵衛督公行

〔成通集詞書〕24

十五首述懐に一蕩盛定

異伝資料

〔新古今集詞書〕15

崇徳院に十首歌たてまつりける時 大納言成通

〔新勅撰集詞書〕ニ

十首歌たてまつりける時 右兵衛督公行

〔万代集詞書〕リ

長承元年内裏十五首に祝を 贈左大臣(時信)

〔私注〕貧道集には「内裏十五首会」といふ表記を詞書にもつ歌が、後に表示するやうに十四首ある。このうち「月不如秋」は、長承二年内裏十首歌会の歌と考へられる(14ページ参照)ので、他にも誤記の歌があるかもしれぬが、十三首が「十五首会」の歌と一応考へることが出来る。この十三首の題を分類してみると、夏三題、秋一題、冬三題、恋四題、祝一題、述懐一題となり、春・秋題の欠脱を予想して補ふ(夏・冬題より少ないことはないであらう)と、当然十五首を越してしまふことになる。この因は、更に何首かの詞書の誤記があるからか二種以上の十五首会の題が混入してゐるところにあるのであらう。表記を信用して、一応後者によつて検討してゆくと、崇徳院歌壇で何度

の十五首会が行なはれたかはつきりしないが、記録では、時信記の天承元年九月九日に一度と、顕輔集の長承元年二月二三日の計二度を見出すことができる。天承元年の歌題はつきりしないが、長承の方は顕輔集によつて十三題が知られる。さてこの十三題を分類すると春3・夏3・秋1・冬3・恋3となるから、当然、秋の二題が欠けたものといふ推測が生ずるのだが、万代集によると「長承元年内裏十五首に祝を」といふ時信の歌があつて、これが誤記でなく、また長承元年に別の内裏十五首がない場合にはこの時の題と考へねばならなくなる。同じ万代集に「長承元年内裏十五首に千鳥を」といふ公能の歌(この歌は統千載にも入る)があり、顕輔の題と重なるので、一応信用すべき可能性も持つてゐるのである。が、長承と天承が一字の差であることや、万代集がはるか後代の資料であるところから、この問題はひとまづ置いて、顕輔集の十三題(春(雨)・帰雁・梅・夏夜・照射・瞿麦・虫・霜・千鳥・落葉・初恋・忍恋・会不逢恋)以下これをAと呼ぶ)を先程の貧道集の「十五首会」の十三首と重ねてみると、七題(照射・瞿麦・落葉・千鳥・初恋・忍恋・会不逢恋)が重複するのである。素朴な題なので問題はあがるが、この七首は一応、天承元年二月二三日の「十五首」と見てよいのではないだらうか。それならば、残りの六題(盧橘・声・水鳥・恋・祝・述懐)はどうか考へるべきか。

さて、成通集の巻頭近くに、「霞・うくひす・さくら・五月雨・ほと、きす・盧橘・鹿・をみなへし・雪・水鳥・あし・祝・恋」といふ一連の歌群がある。これをBと呼ぶ)この中の「声」の歌は新古今に入つてゐて、それには「崇徳院に十首歌たてまつりける時」といふ詞

書があるのである。しかしこの十三首の歌群は、春3・夏3・秋2・冬3・祝1・恋1となつてゐる上、更に「恋」の歌の次には

十五首述懐に一藹盛定

限りありて立はなれなは春霞恋しかるへき雲のうへかな

とよみて侍しを人々あはれかりほめしかはまたの日よみてつかはし、

雲の上にとまる心のあまりにてなをさへ君は残しつる哉

返もとの消息のま、

雲のうへに猶残しつと聞おりも涙の雨はとまらざりけり

といふ贈答歌が続いてゐるのである。これは恐らく、秋一首と、述懐

一首が欠けた「十五首」なのであつて、盛定の歌は「雲の上」といふ

表現から、内裏十五首の述懐題なのであらうから、この間に彼成通の

述懐歌があつたか、或は配列の効果を考へて故意に省いたものかと思

ふ。成通のこの時の述懐の歌は、恐らく今鏡「藤波の下」の

讃岐の院位の御時十五首の歌人々に詠ませ給ひけるに述懐とい

ふ題詠み給ふとて

白河の流れを頼む心をば誰かは汲みてそらにしるへき

と講ぜられける時、むしろこぞりて哀れと思ひあへけり。涙ぐむ

人もありけるとかや

とある歌がそれで、家集ではこれを敢て省いて他人の評判をとつた歌

にすりかへたのではないかと思はれる。盛定の歌も共に大治四年に崩

じた白河院への追懐が主題となつてゐるので、もしこの推測が正しけ

れば崇徳天皇歌会としてはごく初期の、あへて言へば天承元年の「内

裏十五首会」だつたのではないか。さうだとすれば、先程の十三題に

述懐を加へ、祝・恋・述懐で「雑」3となるから、四季・雑各三題計

十五題といふ原形を想像し得ることになるのである。天承元年の成立

か否かは問題としても、先程の貧道集の残りの六題は五題までがBと

合致し、残りが「述懐」であるから、成通集のBはやはり「十首」で

はなく「十五首」の歌群、だと考へてよささうに思ふのである。新勅

撰に「十首歌たてまつりける時」といふ公行の「郭公」の歌があるが

これは崇徳院に奉つた「十首」ではあるにしても他の機会の（事によ

つたら「郭公早過」で長承二年の十首）歌であると考へられさうであ

る。その公行の「崇徳院十五首」と表記する「花」（千載）、「述懐」

（続詞・千載）実行の「水鳥」（新拾・万代）等は全てこの時の「十

五首会」の歌と認めてよささうに思ふ。

以上によつて、管見に入つた「崇徳院十五首」を詞書に持つ歌は、

明らかに誤記である「月不如秋」を除いては、全て二種の十五首に収

まる可能性の大きいことが判明した。先述の時信の歌は、問題を残し

たまま「長承」は「天承」の誤記として一応処置しておく。これが認

められるとすると、崇徳院歌会の歌である表記はもちながら「十五首」

とは記してゐない歌の中にも問題である場合にはこのいづれかの十五

首の歌である可能性がでてくる。平凡な題が多いので危険ではあるが

例へば貧道集の場合のやうに、十五首（霞・鶯・梅・柳・蕨・花・帰

雁・夏夜・萩・女郎花・鹿・霧・虫・霜・雪）の中、Aが五首、Bが

六首、（更に萩・霧は二種のどちらかに入る可能性がある。）と十一首

（或は十三首）も占める場合には、決して小さな蓋然性とはいへなさ

うだ。その他の資料の場合は、後葉集の「新院位におはしましける時

藏人にて侍けるに歌たてまつりける」といふ詞書の時信の歌（水鳥題）

のみを「藏人の時」を手がかりとして、一首だけをと、他は採らぬことにした。

これらを整理して表示してみると次の如くなる。

天承(?)十五首

長承十五首

霞	鶯	桜	五月雨	郭公	廬橘	?	鹿	女郎花	雪	水鳥	芦	祝	恋	述懐
○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
△	△	△					△	△	△					
		○		△?						○		○		
										△				○

通長行信定
成教公実時盛

春(雨)	帰雁	梅	夏夜	照射	嬰麦	?	虫	?	霜	千鳥	落葉	初恋	忍恋	会不逢恋
○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○
							△		△	△				
										○				
		△	△	△	○									

顯輔
教長公能

○印は詞書に崇徳院十五首の表記のある歌。

△印は崇徳院歌会の表記を待つが「十五首」とは記してゐない歌。

この表から問題となるべき点をあげると、二種の題の構成はかなり

近似した傾向を持つてゐるといふことがいへよう。即ち、比較的単純な題であること、四季・雑又は恋が三題づつの構成を持つてゐる(秋は推定だが)こと、四季の場合には、その三題が「天象・禽獸・植物」となつてゐることなどである。そしてどちらかといへば、天承題の方が典型的で、長承題はや、特殊といふことがいへようか。かうした傾向は、十五首題の構成を予想する場合に、当然現はれてくる一般的なものであるかもしれないが、やはり、近接した時と場と構成員との所産であるが為のものと考へたい。そして、かなり長い年月に及ぶ崇徳院歌壇の歌会でも、「十五首会」といふ形式はそのごく初期に属するこの二年にしか行なはれなかつたことや、今迄強引に付会してきた、B題の十五首が、天承元年の会のものであるといふ臆測を、BがAより典型的であることが初度の故で先行するが為のものであるといふことなどを想像したのである。

以上、諸歌集に載る歌を両度の十五首会に分ける作業の為の推論を重ねてきたのであるが、ここで時信記の記事(天承元年九月八・九日条)に戻つて「天承十五首」についての問題を整理しておきたい。時信記によると、十五首の題は六月頃から議定されてゐたといふ。そして、病人で出席できない場合には、預つて必ず持参せよ、といふのだから、若き天皇のこの会にかけた意気込の強かつたことがしられる。ところが出席者達の方は、題が多くてまだ全部出来上つてゐないので「皆悉」が明晩に延ばしてくれと頼んで延期する仕末である。推察するに、殿上人達はだうやらあまり気を入れてはゐなかつたらしい。つまり、この会は厳密な意味での公的な性格を持つてゐなかつたので、天皇の文芸的な好尚の為の催であつたのである。さういへば、この夜

の当座の会は天皇の立腹をなだめるものだったのでないか。ところで、この記事で注目されるのは出席者の名が知られることで、「堪道之輩」として行宗・成通等八人の名が載って居り、それが先述の集成による六人との中、五人が共通してゐるのである。まづ、本稿の集成は（官位のひとりだけ高い実行、へこの時権中納言正三位）には疑点があるが）天承元年九月九日の十五首に比定してよいと思ふ。

なほ、この会は先述の如き事情で被講が九日に延期されてゐるが、八日に行なはれた当座会も、便宜上こゝに付載しておく。十五首会と同じメンバーだつたといふが、成通集以外に見出し得てはゐない。

(4)天承元年九月一五日内裏歌会 付当座歌会

題 寄月恋

当座題 水辺紅葉

作者 成通

本文拾遺

寄月恋 内裏 成通

1 ひとりぬる身を浮雲のはれぬよや恋せぬ月もかけに成らん(成通集)

当座会

水辺紅葉 内 成通

1 紅葉はを折へき物をとあさにて船のよらぬそわりなかりける

(成通集)

資料

〔時信記・天承元年九月一五日〕

今日於御前有和歌題寄月恋某儀如先々頭中将已下人々皆参深更事了

各々分散而依 勅定被召留行宗成通公教長公行等有当座種哥題水辺紅葉藏人予已下三人進和哥丑刻事了人々退出

〔私注〕時信記に「其儀如先々」とあるやうに八月二七日以来の常連の出席したものなのであらう。この中から、行宗・成通・教長・公行と時信ら藏人三人が勅定で残されて当座会が催されてゐるが、このあたりがお気に入り連中だつたのであらう。このうち成通集の例の歌群にだけこの両題の歌が載つてゐる。隣した配列ではないが、一応この日のものと認めて、ここに収めておく。

(5)天承元年九月二六日内裏歌会

題 月照竹 秋花近薫 寄行旅恋

作者 成通 為経(寂超)

本文拾遺

月照竹 成通

1 時雨にもかはらぬ竹の緑さへしろくそ見ゆる秋のよの月(成通集)

イ 河竹にむすぶ水とみえつるはなかる、夜半の月にそ有ける (同)

為経(寂超)

2 呉竹のさえた洩くる月ゆへにおもはぬをみのころももそきる

(今撰集・治承三十六人歌合)

秋花近薫 成通

3 かほりくる籬をみすは聞のうちに花咲やどと人やいはまし(成通集)

たひによせるこひ 成通

4 沓のまは草葉の露にことよせてひるの袂をいか、忍はん(成通集)

資料

〔時信記・天承元年九月二十六日〕

今夕有和哥会題云月照竹 秋花近薫 寄行旅恋 会同人々勅嘯有限於二間弘廂被

講其儀如常教長為講師行宗為読師子刺事了人々分散

〔成通集詞書〕 1

月照竹 内裏

〔今撰集詞書〕 2

讃岐院御時藏人にて侍けるに月照竹といふことを

〔私注〕この会も時信記に「会同人々」とある如く、成通・教長・行宗、そして藏人の時信・盛忠（為経）ら常連が出席してゐたのであらう。成通集にはこの三題の歌が並んで配列されて居り、まづこの会のものに間違ひはあるまい。「月照竹」は二首あるが、いづれか（恐らく「イ」）が被講に及ばなかつた歌稿なのであらう。盛忠（為経）の歌は、今撰集・治承三十六人歌合に「崇徳天皇位の御」時藏人にて侍けるに」とあり、盛忠は天承元年八月以前から六位藏人となり、長承三年正月五日従五位下に叙されてゐる（中右記）のに加へて、九日の十五首題にも名が見えてゐる（5ページ、時信記参照）ので常連と認めて、ここに収めた。

(6)天承元年一〇月二三日中殿御会

題 松樹久縁（松契遐齡）

作者 忠通

本文拾遺

松契遐齡 忠通

1千とせまてかきらぬ松とみとり哉こや君か代のためし成らん

〔後葉・賀〕

資料

〔時信記・天承元年一〇月一日・二三日〕

省略

〔今鏡・すべらぎの中〕

朝夕に侍ふ人に、（中略）常は和歌の会ぞせさせ給ひける。さのみうちうちにやはとて、花の宴せさせ給ひけるに、「松に遐かなる齡を契る」といふ題にて、殿（忠通）より始めて参り給ひけり。まづ大御遊ありて、関白殿（忠通）琴弾き給ふ。花園の大臣（有仁）その時右の大臣とて、琵琶弾き給ふ。中院の大納言（雅定）笙の笛、右衛門の佐季兼、俄かに殿上許さりて、筆筆仕うまつり侍りけり。拍子は中の御門の大納言（宗忠）、笛は成通・実衡なむどの程にやおはしけむ。季成の中将和琴なむどぞ聞え侍りし。序は堀河の大納言（師頼）ぞ書き給ひける。講師は右大弁実光、御製のは誰にか侍りけむ。

〔後葉集詞書〕 1

新院位におはしましける時上達部うへのをのこ共をめしておほんみあそびなどありて松契遐齡云事をよませ給ひける 関白前太政大臣

〔私注〕紙幅の関係で、長文の時信記は引用せず、要点をメモしておく。この会は、崇徳天皇の初度の中殿御会であつた。最初、一〇月一日に行ふ筈であつたが、初度の場合に序をつけるべきか否か、和哥の後の御遊に筆筆を勤めるのが侍臣の中には敦兼以外にゐないが、折悪しく伯母の服喪中で出席できぬが如何すべきか、実光の撰じた「菊

契遯年」の題は、重陽以後には残菊の心となるから賀の会にふさはしくない、など問題が百出して結局二三日に延期されたものである。序の問題は、今度は中納言師頼が、次回には内大臣有仁が勤めることになった。これは堀川天皇の初度御会（嘉保三年三月）に中納言匡房が長治（二年三月五日堀河殿初度会カ）御会に入道右府（俊房）が序を草した先例（俊房の場合存疑）による。敦兼の問題は除服を早めること、題は、松樹久緑・竹無改色・鶴不知年の中から改めて撰ぶ（結局松樹久緑となる）ことで解決した。出席の殿上人には、顕輔・行宗・敦兼・顕頼・実光・成通・公教・師俊・顕親・重通・季成・公隆・忠基・経定・教長・経親・公行・公能・俊雅・憲俊・雅教の二一人が「清撰」された。なほ、季通は、「初度六位不進先例也」といふ理由で召されなかつた。当日は、関白忠通、内府有仁以下の公卿にこの二人を含んだ会となつたわけである。現存諸歌集には、「松樹久緑」題の歌は見出し得ない。

ところで今鏡の記事は、この会のことといふ明徴がないし、題が「松樹久緑」を「松契遯年」、有仁の方が「内大臣」を「右の大臣」（この年一二月二二日に転じた）、敦兼を季兼（敦兼の子）としてゐるなど、問題も多いが、「さのみうちうちにやはとて花の宴させ給ひけるに」が、この年の九月と十月の御会の様子に合致すること、当日の御遊の構成が、時信記に一致すること、敦（季）兼が「俄かに殿上許さりて簾築仕うまつり侍り」とあるが、前記の事情と符合することなどから、この日の記事と考へておく。とすると、詞花集の「松契遯年」の題を持つ忠通の歌は、この日のものとして推定してもよいと思はれるので、ここに採録したわけである。

(7)長承元年一二月二三日内裏十五首歌会

題 春（雨）、帰雁、梅、夏夜、照射、瞿麦、？、虫、？、霜、千鳥、落葉、初恋、忍恋、会不逢恋

作者 顕輔、教長、公能、

本文拾遺

春（雨） 顕輔

1 その色とめには見えぬを春雨の野への緑をいかてそむらん

帰雁 顕輔

2 契りけん程やすきぬと急くらむよるもすからにかへる鷹金

教長

イ霞わけ越路にかへるかりかねの声にそとものかすはしらる、

梅 顕輔

3 かほらすはたれかしらまし梅花しらつき山の雪のあけほの

教長

口梅か、を吹くる風はさそふとも色をはあたにちらさ、らなん

夏夜 顕輔

4 まことにやあかしかぬらん夏のよを独ね覚の人にとは、や

教長

ハあけゆけはいつもいとへと夏夜やわきてわひしき葛城の神

照射 顕輔

5 梓弓たかまと山にともすひはほくしにかけているにや有覧

教長

6 夏虫をなにはかなしと思ひけん鹿もともしにみをはかへけり

瞿麦 頭輔

7 朝またきおれふしにけりよもすから露をきあかす撫子の花

教長

8 咲しよりわか瞿麦としめをきてよるも露たにさらすこそみれ

虫 頭輔

9 声たかしすこしたちのけ葦さこそは草の枕なりとも

教長

ニのへことにはたおる虫のこゑすなりふく秋風やよさむなるらむ

霜 頭輔

10 かるの池の入江をめぐる鴨とりのうはけはたらに置る朝露

教長

ホときはなるをさ、かはらも霜ふれは同じ枯野にまかひぬる哉

千鳥 頭輔

11 あふみちや野島かさきの浜風に夕波千とり立さはくなり

教長

12 白浪と、もにたちゐるはま千鳥声はかりこそまきれさりけれ

公能

13 小夜ふけて声の末こそ浜風にうらかなしくも鳴く千鳥かな

(続千・冬、万代)

落葉 頭輔

14 紅葉はをよもの嵐はさそへともみなこのもにかへる成けり

教長

15 吹風に紅葉のにしきふきてけりいつらはしつの伏屋てふなは

初恋 頭輔

16 昔より人まとふとはき、しかと恋てふ山にけふよりそいる

教長

17 うけひかんことはしらねと今まてになとかは君を見初さりけん

忍恋 頭輔

18 浅ましや千鳥のえそのつくるなるとくきのや社ひまはもるなれ

教長

19 君こふるなみたの玉を人とは、露にぬれにし袖とこたへん

会不逢恋 頭輔

20 ひと夜とはいのらざりしをかひもなく心定めぬうき島の神

教長

21 あやなくもけふさく暮をいそく哉あひ見しよはの心ならひに

資料

〔頭輔集詞書〕1

長承(崇徳)元年十二月廿三日内裏和歌

題十五首春

〔貧道集詞書〕6

同院位の御時十五首歌人々よめるうちの

照射歌

〔続千載集詞書〕13

長承元年内裏の十五首の歌に千鳥を

〔私注〕天承元年九月九日内裏十五首歌会参照(6ページ)

(8)長承二年内裏十首歌会

題 初聞鶯、毎年見花、遠近卯花、郭公過暁(早過)、月不如秋、田家

秋雨、林下時雨、行路（初）雪、寒鴈添恋、船中暁恋

作者 実行、実能、行宗、教長

本文拾遺

初聞鶯 八条入道太政大臣（実行）

1 けふそ聞太山かくれのふるすより梢にうつる鶯のこゑ

（統詞花・春上）

行宗

2 たまさかに我まつ妹にあふよりも猶めつらしき春の鶯（行宗集）

毎年見花 行宗

3 年をへて散かふ花とおきなさひ我もとゆひと何れしるしも（行宗集）

遠近卯花 教長

4 何せんにたつねきつらん卯花はわかきねにもかはらさりけり

（貧道集）

郭公過暁 行宗

5 しの、めに今そすくなる郭公音羽の山のをとにたてつ、（行宗集）

教長

6 郭公まちあかしたるかひもなくた、一声にすぎぬなるかな（貧道集）

月不如秋 実能

7 よと共におなし雲居の月なれと秋は光を照りまさりける

（統後撰・秋中）

行宗

8 冬のよの氷とみゆる月よりも秋の影にはしかしとそおもふ（行宗集）

教長

9 いつとても月にあくよはなけれ共秋としなれはねられさりけり

田家秋雨 行宗

10 山里のさくくりの上にしりかけてをしねこくまに雨を降ぬる（行宗集）

イ 雨ふれは門田のいねそしとろなる心のまゝにかふき渡りて（同）

教長

11 仮ふきの山田の庵の隙をあらみもりくる雨にもまかいらせてそみる

（貧道集）

林下時雨 行宗

12 むれ立る木々の梢に隠るれと頼むかひなくぬれそほちつ、（行宗集）

ロ みわたせは時雨てわたる絶間より木々の梢は色つきにけり（同）

行路初雪 行宗

13 たひ道に初雪ふれはいかにせんこ、ちまといて詮方もなし（行宗集）

教長

14 急くとていか、はふまん初雪のかのこまたらにふれる山ちを

（貧道集）

寒鴈添恋 行宗

15 冬寒み声さえわたる鴈かねに我おとらめやとしそおい（行宗集）

ハ 我恋はことにふれても増る哉雲井の鴈はよろつならねと（同）

教長

16 冴わたるよはのねさめの鴈かねは恋せぬにたにいか、悲しき

（貧道集）

船中暁恋 行宗

17 明かたに浦こく舟のこ、ちして我もおとらす楫のしづくに（行宗集）

教長

18 あげくれに何と船出をいそくらん君にあふへき旅のうちかは

(貧道集)

〔私注〕貧道集に「内裏十首会に」として、遠近卯花(4)・(郭公早

過)(6)・船中暁恋(16)の三首の歌がある。一方、行宗集は雑纂的

な配列だが、その後半に初聞鶯・船中暁恋(2・3・5・8・10・12

・13・15・17)の九首が連続して並ぶ歌群がある。恐らくこの九首は、

貧道集の二首(6・16)との一致から「内裏十首」の歌群と見做して

よからう。そして、貧道集の遠近卯花が加はることによつて、四季・

恋各二題計十題の十首であつたことが判明する。この十首の題はかな

り特殊なものであるので、当代の資料で同題のものはほゞこの十首の

歌と認めて差つかへあるまい。貧道集では以上のほか「内裏十五首会

に」として「月不如秋」(9)、単に「新院位の御時」「讃岐院御時人

々に歌めし次に」「内裏会」として「田家秋雨」(11)・「行路初雪」

(14)・「寒鷹添恋」(16)とある四首もこの十首の際のものとしてよ

からう。続後撰の「長承二年内裏にて月不如秋といへる心を人々よみ

侍りけるに」とある徳大寺左大臣(実能)(7)、統詞花の「新院御時

うへの人々に歌よませさせ給けるにはしめてうくひすをきく心を」の

八条入道太政大臣(実行)(1)の二首もこの際のものとして考へてよか

らう。但、この「初聞鶯」は比較的が多い歌題であり、例へば行宗集

の巻末近くに同題で三首ある例などもあるので若干危険性もあるかも

しれない。なほ、行宗集には先述の歌群とは別に「田の家の秋のあめ」

(イ)・「はやしのもとのおくれ」(ロ)・「寒鷹増思」(ハ)の三首

が連続する歌群があり、或は同じ時の詠でないかと疑ひ併載した。

記録類にはこの会の記事は見当たらないので、一応、続後撰の記載を

信じ、長承二年の開催としておく。もつと多くの参加者もあつたと

考へられるが、いはゆる内々の会であつたのであらう。歌の質からみ

ても後代の評価が殆んどなかつたのはやむを得ぬところであつたと思

はれる。

(9)長承三年四月一日中宮(聖子)初度歌会

題 藤花年久(藤花久句)

作者 宗忠、師頼、雅光

本文拾遺

宗忠(内大臣)

1 みかさやまかさしにさせとさくふちの花こそちよのしるしなりけり

(中右記)

師頼

2 春日山きたの藤なみ咲きしより栄ゆへしとはかねて知りనికి

(詞花・雑上、後葉・雑二)

雅光

3 咲そむるわか紫のふちの花にほひは千代の春もかはらし

(今撰・春、統詞花・賀)

資料

(中右記・長承三年四月十一日)

天陰小雨、今日依吉日、中宮御方初有歌会、入夜陰着直衣参宮御

方(中略)召切燈台円座、講師座置文台、硯宮蓋殿上人従下藤置

歌、次上達部起座置了、権左中弁公行朝臣為講師、民部卿(忠教)

為読師、殿上人為通、資賢、季兼、光房、資信、教長朝臣、忠基

朝臣、経定朝臣、頭中将季成、亮顕輔朝臣、行宗朝臣、上達部及
 関白殿歌講畢、女房歌二首書紅紫薄様二重被出、置、同講了及夜
 半退出、序代誠優美也、華実相兼也、(下略)

〔詞花集詞書〕 2

新院位におはしまし、時皇后宮の御方に上達部うへのをのことも
 をめして藤花年久といふ事をよませ給ひけるによめる

〔後葉集詞書〕 2

詞花集に大略同じ故省略。

〔今撰集詞書〕 3

女御殿にてはしめて和歌ありけるに藤花久句といふことを

式部少輔雅光

〔続詞花集詞書〕 3

女御御許にはしめて人々に歌よませ侍けるに藤花久句といふこと
 をよめる 大江雅光

〔私注〕崇徳天皇中宮聖子は関白忠通の女である。天皇歌壇に忠通の
 協力は大きかったが、この会は、その歌壇こそつての、藤氏出身中宮
 を寿ぐ会であつた。「藤花久句」の題はその故のものであらう。若き
 天皇にとつては、この風雅な有力者を後楯とする聖子への寵愛は深く
 従つて血縁関係の濃い侍臣達や女房達の交遊が頻繁であつたことが多
 くの資料によつて知られる。今鏡・袋草紙・後葉集にのる中宮御方の
 小弓御遊の際の忠通の機智のエピソードとか、続詞花集にみられる、
 内裏方女房と中宮方女房の歌合の準備の際に天皇自ら女房に代つて贈
 答の応酬をしてゐる話など、天皇のくつろいだ姿を初め、関白忠通は
 勿論、侍臣達の活躍するサロンの雰囲気や伝へるものが多い。この会

は、その中での、比較的早い時期に属する賀会だつたのである。

〔補註〕天承以前の崇徳天皇関係の歌会は分明ではない。しかし、今
 鏡に「幼くおはしましけるより歌を好ませ給ひて、朝夕に侍ふ人々に
 隠し題詠ませ、紙燭の歌、金椀打ちて響きのうちに詠めなどさへ抑せ
 られて、常は和歌の会ぞせさせ給ひける。さのみうち／＼にやはとて
 花の宴せさせ給ひけるに」とある。「花の宴」は、先述(10ページ)の
 やうに天承元年一〇月二三日の御会だらうから、この年をあまり遡ら
 ないと考へてよいが、次にあげる大治五年九月一三日と推定されてい
 る殿上藏人歌合は明らかに崇徳天皇関係の歌会だし、同じく今鏡に「ま
 だ幼くおはしまし、時『ここをこそ雲の上とは思ひつれ高くも月の澄
 み上るかな』など詠ませ給へりしより、かやうの歌のみぞ多く侍るな
 る」とある歌が、この殿上歌合の「禁中月」の題と或は関係があるか
 もしれないので、大凡、大治五年(天承元年の前年、天皇一二歳)頃
 からこの歌壇の活動は始まつたものと考へてよからう。

なほ、和歌文学大辞典付録年表の大治五年の頃には、三月四日「天
 皇三条京極第より土御門内裏に還る、和歌御会あり(題、遠尋山花)」
 と、千載集を典拠とした記載があるが、稿者の調査の範囲では明徴を
 発見し得ない上、この会での俊成の名歌「面影に花の姿を先き立て幾
 重越えきぬ峰の白雲」は、まう少し後年の作のやうに思へるので、こ
 こでは取りあげぬことにする。^{註1}

そこで明徴のある次の催のみを記し、私注を付しておく。

○大治五年九月一三日内裏藏人歌合

題 禁中月、野径月、海上月、寄月祝、寄月恋

作者 範兼、盛定、惟兼、為基、時信、為盛

本文 省略

〔私注〕作者の六人が、共に六位藏人として殿上にあつた時の名月の催しといふ根拠から、「平安時代歌合年表」（久曾神昇氏）、「桂宮本叢書卷十四解説」（橋本不美男氏）、「平安朝歌合大成六」（萩谷朴氏）いづれも一致して、大治五年九月十三夜の張行と考へられてゐる。これが事実とすれば、崇徳天皇内裏歌壇の、現存資料による最初の催しといふことになる。天皇（この時一二歳）がどの程度関係してゐたかは不明であるが、寄月祝の歌などは明らかに天皇祝賀の内容であり、臨席してゐたと考へてよいであらう。萩谷氏もいはれる如く、「歌人即方人、当時即詠の歌合で、判者も別に居ない」、小規模の歌合だったのであらう。

今鏡に、「かばかり（歌）好ませ給ふに、歌合の侍らざりけるこそくち惜しく侍りしか」と、崇徳天皇歌壇に歌合の催がなかつたことを記してゐるが、これは恐らく、歌合の規模が大きくはなかつたことを示すものであらう。この他に、本稿には載せられなかつたが、保延元年四月二九日内裏歌合^{註2}（平安朝歌合大成七所収）や、続詞花集雜上に

皇嘉門院中宮と申しける時宮女房と内の御方の女房と歌合有へし
とていとみあへるあひた歌よみつついひつかはしけるに我御方
の女房にかはらせ給ひて宮の御方にさしをかせ給ける 新院御歌

久方のあまのかこやまいつるひもわかたにこそ光さすらめ

といふ歌があり、女房同志の歌合はあつたことが知られる。結局、今鏡の記事は、勅撰集撰集や、久安百首と比肩できるやうな晴儀の歌合はなかつた、といふ意味なのであらう。

なほ、先述の如く、今鏡所載の御製「ここをこそ雲の上とは思ひつれ高くも月の澄み上るかな」（続古今・秋上にもあり）は、この歌合の「禁中月」と関係があるかもしれない。

註1 拙稿「崇徳院歌壇資料集成(2)」平安朝文学研究第二巻第四号（昭和

和四二年二月）参照

註2 右拙稿参照

〔付記〕成稿に際しては、橋本不美男氏及び井上宗雄氏の御示教に負ふところが多い。記して感謝の意を表する。